

既存のスキーマで解決できない！？そんなとき……

本研究が目指す「心豊かで実行力のある子供」の育成において、学習者（つまり子供）は、既存の知識や思考の枠組みである認知スキーマだけでは解決できない困難な課題に数多く直面します。このような状況下で、まずは教科独自のアプローチを用いて既存のスキーマを調整し、課題を乗り越えようとするのでしよう。（これがすなわち「試行錯誤」ですね）

しかし、その試行錯誤すらも難しい課題に直面することも多々あるでしょう。これはどういうことかという、学びを認知的な側面だけで捉えることに限界があることを示しています。この限界を突破し、学習を持続的かつ主体的に推進するためには、認知以外の側面が不可欠となります。ですから、今年度だけで研究は完結しないのです。

例えば、音楽科の学習に見られる「こう表したい」という「願い」や高揚感、あるいは算数科で図形を分解し体積を求めようとする「納得解を求める姿」といった情意的な側面です。これら情意面は、今日のご授業での子供たちの姿から、認知的な枠組みの限界に直面した際に、新たな学習や試行錯誤へのエネルギーとなり、スキーマの調整・再構築を促すものと思われまます。音楽科のご授業で、音がぴったり合ったと感じたときに思わず顔を見合わせて手ごたえを確認し合う様子が見られましたように、この情意面は、他者との協働的な学びの中で相互に影響し合い、動機づけを高め合う役割も果たします。今年度は主として認知的な側面から研究を深めていきますが、それに付随して非認知的な側面も重要になってきそうです。

論点整理がとりまとめられました。簡単にざっと価値付けます。

さて、中央教育審議会「教育課程企画特別部会 論点整理」（令和7年9月25日）の内容を概観しますと、本校の研究計画と連動するところが多く見られます。

例えば、「AI時代を強く生きる子供」の育成は、「論点整理」の第四章「情報活用能力の抜本的向上と質の高い探究的な学びの実現」と強く連動します。また、「論点整理」の第二章で提示された「学びに向かう力、人間性等」の再整理は、「心豊かさ」を単なる道徳的側面に留めず、認知的な成長と「実行力」を支える中核的な要素として明確に位置づけることができます。

そして何より、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力としての位置づけが、①主体的に学習に取り組む態度、メタ認知等と②協働する力、持続可能な社会づくり、感性・人間性等に整理された点は要注目です。この整理は、「学びの中動態」が目指す、学習者が自ら学習に作用しながら、その作用を自らに及ぼすという、本当の意味での主体性を体現するものです。本校の研究計画では自己調整学習方略に「認知的側面と動機づけ的側面」の両方から着目していますが、この論点整理では、中動態的な作用の中核であるメタ認知（上記①）と、協働性・人間性（上記②）を育むことが「学びに向かう力」の全体像であると明確に示されています。「論点整理」が「学びに向かう力、人間性等」を認知的な側面（メタ認知）と非認知的な側面（協働、感性）に分けて捉え直していることは、本校の研究目標である「心豊かで実行力のある子供」を育成するためには、中動態的な学びの実現を目指し、メタ認知的な方略指導と、協働や探究の中で育まれる情意・動機づけの指導を、自己調整学習という枠組みの中で統合して行うことの必要性を示していると言えます。